

## 中国北京を訪問して

北川内科クリニック 北川 鉄人

1990年10月11日午後5時20分発の中華民航にて成田より北京に飛立った。広大な大地にわずかな光をみる中国大陸の夜をながめ、やがて空港におり立った。そこに一人の中国人が「北川先生」とプラカードをもって立っていた。通訳でツムラ北京支局長の親友、任海寿氏である。さわやかな笑顔と日本語での出迎えをうけ、機内での不安は一掃された。宿泊先の長城飯店まで40分、空港よりまっすぐな道がつづいている。夜のとぼりがすでにおりかかっておりガスと霧につつまれ、両側にしだれかかる大木の間をぬって車はホテルへ到着した。翌朝、北京中日友好病院で演題名 A case of Crohn's Disease associated with primary sclerosing cholangitis (five year follow-up study) のポスターの前で説明会があった。オリンパス光学アジア担当山部長が中国語で通訳をされた。きれいなポスターと内容の深さ、日本の内視鏡のすばらしさなどに感嘆したようであり、昼食をおえた先生方が大勢発表をきいていただいた。とくに中日友好病院戴希真先生とともに Min Zhang chen 会長先生や楊思鳳医師、哭克利医師などにきいていただいた。Zhang Jinkun 教授は発表中の2つの疾患は、めずらしい結合織病の症候としてとらえられて興味があるといわれた。そのあと中日友好病院漢方医学教授の金恩源先生のもとで、治療中の患者（癌手術後、胃潰瘍など）4人の診療にたち合い漢方薬投与と西洋医学の診療について討論がおこなわれた。後日、10月25日、金教授は富山医科薬科大学祭に富山へみえ、当病院にも立

寄られ漢方と西洋医学の接点という演題で御講議をうけた。

さて、中国の発表をおえ昨年事件のあった有名な天安門広場を散歩、人の多いのに驚く。中国国家のシンボルとしての毛沢東のミイラの見学は遠慮して、すぐ万里の長城へとむかう。北京から車で1時間半、北京西北70kmのところに位置し、古代建築史上の奇跡といわれ、月からみえる地球唯一の建造物であるとまでいわれている。長く険しい道のりであり、その頂上に立つと千古の昔がしのばれ立ち去りがたい気分となった。快晴であるが強風が吹き、とくに紅葉と青空と雲のたかさとでまるでパノラマをみているような壮大な気分ひたりスケッチを数枚描いた。

中国の印象としてお土産屋にいたるまで全て国営となっている。人間としては他の外国人より日本人にとって親しみをもったような印象をうけた。とくに通訳の任海寿氏は親日家で私には親近の情を示してくれた。(彼はシルクロード近辺の出身で父は大学教授である。)中国は日本のような保険制度がなく、とくに国民の80%を占める農村民に対しての医療保険制度は定められていない。入院予約に1年分の予約金を払わねばならず、医師の地位もそれほど高くない。日本の医療制度の現状にいろいろの不満もありますが、今再び日本の医療の長所を見直す気持ちにもなった。

中国の民衆は日本人と異なり、人間性が豊かで言葉が通じなくても友人のように接し常に我々日本人から何かを学ぼうとしている。

旅程をおえ、紅梅の軸を記念として買って

JALで日本に帰国した。

万里の長城



万里の長城にて (1990.10月)